

## ふるさとは 遠きにおいて…



北広島医師会  
北広島メンタルクリニック **あな ざわ たつ じ**  
**穴 澤 龍 治**

この文章を書く材料を探そうとパソコンの中をひっくり返していたら、何と12年前にも北海道医師会報に文章を寄せていたことが判明しました。副題は「親離れ、子離れ」。私の今の地元・北広島の小学校を卒業した二男を故郷・函館にある私の母校の中学部に送り込み、寮生活をさせた当時の心情が書かれていました。その文章を読み返し、当時のことを鮮明に思い出しました。その後、二男の高校卒業と入れ違いに中学部に入学した三男の中高時代と合わせて12年間PTA活動を行い、その間函館には何十回も行きました。今、その子供たちは2人とも卒業して函館から出てしまい、申し訳ないことに実家にいる老親のところに顔を出す機会もめっきり減りました。

しかし、たまに函館に行く度に、「こここそが自分の居場所なのかもしれない」と感じる自分がいます。幼少時にあった畑や建物、お店がなくなっていたり、あれほど賑わっていた繁華街もシャッター街になっていたり、ほとんど人が歩いていなかったり…多くのものが時間の経過と共に変化してしまいました。昔の自分を知る人も減りました。私を可愛がってくれた近所のおじさんやおばさんたちも、高齢者施設に入ったり、既にこの世を去ってしまった人がほとんどです。私の父も2021年の桜が満開の頃にあの世へ旅立ちました。でも、変わってしまった多くのものの中にも、今も変わらずそびえる山々、そして海、面影が残る街の風景、老舗の変わらぬ味、小中高時代の友達…ノスタルジーを感じさせる存在があまりにも多く、やっぱり自分が居るべきなのは函館なのかな～、と私に感じさせます。一緒に函館に行く機会の多い同郷の女房も少なからずそう感じているようです。

我が家には子供が4人いて、うち長男が先日ようやく就職して扶養を離れました。そして、この春には長女が大学を、はじめに函館に送り込んだ二男が大学院を卒業して社会に出る見込みです。あと残るは今大学1年の末っ子だけ。その末っ子にもお金がかからなくなったら、第一線を退いて故郷に帰ろうか…そんな話を女房としています。

でもまあ、とりあえずは、私の大学の後輩である長女がこの春卒業後は初期研修を函館で行うそうで、国試に合格したら少なくとも2年間はまた函館と縁ができそうです。これからは、娘に会うのを口実に、またせつせと函館に出かけて、もしかしたら実現するかもしれない故郷での生活に備えようかと

思っています。

かの室生犀星が「ふるさとは遠きにおいて思ふもの…帰るところにあるまじや…」と詠いましたが、はたしてどうなのでしょう。それを実体験すべく今からあれこれと構想を練っています。



写真1：機上から見る函館山と街並み。もうすぐ函館空港に到着。わくわく感が抑えられません。



写真2：私と女房、2人の母校の前でツーショット。